

分科会 15

ACT などの訪問支援と連動した家族支援のあり方

～支援の受け手だけではない、家族の様々な役割を考える～

岡田久実子（さいたま市精神障害者もくせい家族会）
小河原麻衣（訪問看護ステーション ACT-J）
角田玲子（訪問看護ステーション ACT-J 利用者家族）
鷹子剛（訪問看護ステーション Q-ACT）
宮崎富夫（筑紫地域精神障害者家族会会長）
司会進行：小河原麻衣（訪問看護ステーション ACT-J）

この分科会では、3か所で行われている家族支援のあり方について支援者の立場、家族の立場、家族が行う家族会での立場での発表。ACTや地域にある家族支援のあり方を様々な視点から連動し充実させる為にも家族の視点、ACTの中でのグループや個別の支援のあり方について議論を深めました。

まずは6人(当日参加)のシンポジストから発言をいただき、休憩時間に参加者よりご質問を書いてもらい、後半に発表者がそれにお答えする形としました。

●発言者とそのポイント

- ① ACTでの家族相談会の立ち上げ：個別支援と連動したグループでの家族支援が大事である。普段の生活を細かく相談しているから、グループで他の家族からのアイデアなどを活かし、それを個別で家族支援していけることの大切さ。参加した家族からは受動的な家族も多く、支援者が行うものはどことなく病院的、もっと本音を語れる場が必要などと課題を提供。
- ②お茶飲み隊の始まりと実際：家族が家族に訪問することで、閉じた家族の心を少し開いていくこと、事例を紹介しながらこれまでの「邪魔にならない支援」の新しい支援の形を発表。
- ③ ACTでの家族支援の活躍：父として30年向き合ったこれまでの心の変化、気づきなど。待っているだけでなく出向き訪問していくことの大切さと立ち上げから関わることへのつながりを投げかける。

●参加者（70名程度）からのご質問の一例

「ACTの活動資金について？/採算はとれているか/24時間支援は大変ではないのか」

「家族支援で苦勞している事や工夫している事は？」

「地域の施設とどのように連携をしているのか？/卒業先はどうなるの？」

「家族支援を受けたいが近くに訪問看護やACTがない。お茶飲み隊に入るには？」

「ピアサポートの方がいないと発表にあったが、ピアはたくさんいるから、需要と共有があるから県をまたいだつながりが大事」

●シンポジウムについて

ACTや訪問看護など、ご自分に合ったサービスが見つからず不安を抱えながら生活しているご家族が多いと感じましたが、ACTがすべてではなく一つの手段でしかない。横のつながりを大事にしたネットワーク、様々な形の家族支援が求められているのだと思いました。

《小河原麻衣（訪問看護ステーション ACT-J）》